

お や べ ぜん す け

2. 小谷部全助山行譜

一橋山岳部の初期 10 年に続く時代は、小谷部全助という人の出現によって、それまでとはいささか異なる方向へ舵が切られる。それは一言で言えば登攀的要素の強い登山活動への傾斜である。次の一時期の記録は、小谷部さん自身の行動を軸に捉えるのがよいだろう。勿論多くの部員の様々な活動が今まで通り続くのではあるが、それが小谷部さんの存在によって更に求心力が強まっていくのが、この時代の特色と言えよう。

<山行譜の語るもの>

人の真の姿は、その行動そのものに表れる、と思う。貫く思想とか主義とかは言葉で表せば理解出来るとしても、それよりも無言であろうと行動自体を知ることが最も雄弁に人の生き方の本質を物語るのではないか。

幸い、対象になる 4 冊の『針葉樹』には小谷部さんの登山記録が殆ど全て載っているのだから、それを追いかけて少々想像を逞しくすれば、その人生を生々しく知ることが出来ると言える。何しろ行動の密度も高いが、これほど記録が丁寧かつ網羅して残されているのはほかの時代になく、この頃の人たちの優れた才能を思わせる（記録欄は 7、8 号は地域別、9、10 号は時系列。また巻頭記事は概して編集や表現が巧みで、読みものとして楽しい）。また、小谷部さんの評伝といった文献はいくつかあるし、盟友、望月達夫さん執筆の切々として人柄を語る追悼記「小谷部全助のこと」もあるが、山行譜自体に目を通すこと程、深く理解する手だては、他にないだろう。

若くして亡くなった小谷部さんの殆どの登山活動は大学在学中のそれであり、その中でも集中的に、予科 3 年から本科 2 年（昭和 9～11 年度（1934.4～37.3）、20～23 歳）の 3 年間に集約されている。その間、初歩的な山歩きから、実に積雪期初登攀に至るのであり、殆ど自力で、登山の価値観を追求する構想を組み立てるところから、支援部員の統率を図り先頭に立って登り切るところまで、実践する。時代の背景とか山岳部の良き仲間の存在があつての話だとしても、行動がそのように繋がって行く経緯が実に素晴らしい。

<一橋山岳部の礎>

小谷部さんの山岳部での活動は、初期の山歩き（南アルプスが多いのが特色である）、部員親睦や訓練などの合宿山行、先輩付き合い登山、逍遥と力試し目的の単独行、そして登攀目的の体系的集団山行、に分かれよう。それまではスキー合宿、夏山のいわば課外活動登山、が主な合同活動だった山岳部だが、この時代になって、谷川岳、富士山、夏の岩登り、秋の偵察山行、など一連の合宿スタイルが定着してきている。その後の時代に典型的に山岳部の活動はこうする、とされた原型がこの頃出来上がったわけである。

その土台形成と共に、時を待たず直ちに、北岳、鹿島槍、穂高が積雪期登山の目標として選ばれ、バットレス 1、3、4 尾根、荒沢奥壁北稜、前穂東壁、の積雪期初登攀に至る。この飛躍

は、おそらく主に小谷部さんの発想から生まれてきたと思われるが、登攀技術の体系的訓練を受けることもなく、当時最先端の登攀対象を目指すのだ（前記の望月追悼にある表現によれば、「そのひとつひとつが創作であり君の天才的な一面すら感ぜられ」、「当時の東京商大山岳部は、わずかに堀岡清氏のほかに登攀技術のうえでは直接指導をあたえられた上級部員とてなく」）。それも、誰もが海外だ、ヒマラヤだ、という時世に抗して、手近に匹敵する山々や登り方があるとして、幕営による極地法を採っての積雪期岩壁初登攀だ。ここのところを、山行譜が物語るのである。

きっかけは自分の目で見て素晴らしい壁だ、という動機だったようだが、バットレスにしろ、荒沢奥壁にしろ、先行した立教など他大学の記録を調べて巧みに選択し、全くの処女岩壁ではないから登攀価値を求めていきなり核心部を突き、無雪期に必ずトレースして、かつ少ない部員でも団体登山として登攀スケールを整えるなど、まことに冷静な計算づくの構想である。そういう伏線となる幾つかの山行、必ず助力する仲の良い登攀パートナー部員数人、献身的なサポーター部員たち、そして常に先頭に立つ激しい登攀意欲、が展開される行動記録の背後にある。

<小谷部哲学ともいうべきもの>

登山の価値は困難を克服する登攀にある、究極の登山はヒマラヤ処女難峰の団体登山だ、それにはまず個々が自己修練をし「個体完成」（小谷部さんの文中にある表現）することである、山岳部は、ヒマラヤを考える前に、個体完成すべく皆が一致団結する登山を志すのだ、というのが貫く精神であると言っているだろう。理想の山岳部登山は、例えば積雪期の前穂北尾根經由滝谷最難未踏岩壁登攀である（因みに鹿島槍荒沢奥壁はその代替案。また自己完成の証したるべく、最終学年で挑戦した冬の前穂東壁は悪天候、春は後輩の事故で挫折した）。

極地法などの団体登山では、皆が登攀の機会を享受できるわけではなく、皆が皆個体完成するには適さない方法であり、前記主張は矛盾するのだが、多分少数による今日アルパインスタイルと呼ぶ方式を言外に想定しているのだろう。つまり自己を含め選ばれた数人が個体完成するしかない、という実態は、リーダーシップを次期生に譲った直後の前穂東壁積雪期初登成功と犠牲、さらに大塚・山田ペアの厳冬期滝谷初登、その後の遭難頻発、と明暗綾を為して続くのである。

<以下は編者所感>

1934～37年の冬期に次々と、京大は白頭山、大興安嶺、冠帽峰など大陸の平らな山へ遠征したのだが、小谷部さんは、そういう所謂システム登山をやる前に個体完成すべきだろう、と言っている。しかし1936年1月に立教山岳部（山県、湯浅、浜野ら）は鹿島槍天狗尾根から北壁ピーククリッジという冬期初登を果し、同年10月同じメンバーたちがナンダ・コット初登頂をしている。

一橋山岳部は1937年1、3月に北岳バットレス・荒沢奥壁を登り、見方によれば同じようなことを1年遅れて追隨してやったとも言えるのだが、同年後半には前穂東壁に集中した。組織的な山岳部としての基盤が固まったとは言えぬ状態だから、小谷部さんの念頭には、さあ個体完成したから次の段階への飛躍（つまり海外で未踏峰登頂）を考えよう、という思考はなかったのだろう。

しかしながら、『針葉樹』9号の荒沢奥壁の記事の次には望月さんによるシッキム・ヒマラヤ登攀年表が掲載されているのであり、また後年(1940年)望月さんは『山岳』35年に「ミニヤ・コンガ山群」に関する詳細な登攀史を寄稿している。こういう研究は、そこに行きたいという熱情がなければ書けないものであり、機運が訪れば望月発想、小谷部構想という海外遠征となったかも知れない。残念ながら現実には、小谷部さん罹病、戦雲への時局、など運命は暗転した。一年歯車が早かったら、違う展開だったかも知れない。

その後の後輩たちによる類似活動の展開、物資なき時代でも続いた山への情熱、戦後になって集団重視の積雪期登山への復活、そして兎も角も海外遠征。小谷部さんほど个体完成に近付いた後輩は結局出現していないと思われるが、生きていたらわれわれに向かって何と言うか、各々この山行譜をじっくり見れば自分で答えを出すことが出来るだろう。



小谷部全助山行譜（針葉樹掲載記録）

《註》 山行ごとに、登った月、目的の山或いはコース、括弧内に同行者（初出は姓名、再出は姓のみ）を記載し、以下は日単位で入山から下山までの辿ったコースを簡単に記す。末尾に、該当山行に関し『針葉樹』に掲載された記事から本人記述など核心に触れる説明を追記した。特に重要な意味を持つ山行は太字記載とした。

1932（昭和7年） ・ 予科1年 ・ 18歳（*）

（*） 1914（大正3年）1月2日生であるので、この年1月に満18歳となる。

4月、東京府立第八中学校をへて、東京商科大学予科入学。表記ではこの年予科1年とする。

6月 大岳・御前山（同行：遠藤竹雄）

6/18 御岳駅—大岳小屋

19 —鋸山—御前山—御岳駅

8月 大岳・雲取山（他1名）

8/26 御岳駅—御岳—鋸山—氷川—小河内

27 —蜂谷川—甚助小屋

28 —雲取山—七ッ石—氷川—御岳駅

10月 甲斐駒ヶ岳（単独）

10/25 日野春—笹平—黒戸山—屏風小屋

26 —七丈小屋—甲斐駒—七丈小屋

27 —屏風小屋—尾白溪谷—駒前宮

28 —台ヶ原—日野春

1933（昭和8年） ・ 予科2年 ・ 19歳

1月 大岳・大菩薩峠（遠藤）

1/ 3 五日市—馬頭刈山—大岳神社小屋

4 大岳往復—大ダワ峠—氷川—小河内

5 —余沢（遠藤は上野原へ）—橋立—赤沢小屋

6 —フルコンバ小屋

7 —大菩薩峠—姫ノ湯山の家

8 —スキーで賽ノ河原往復—番屋—塩山

3月 大菩薩付近（単独）

3/ 7 塩山—雲峰寺、スキー練習—大菩薩館

- 8、9 滞在
- 10 天狗棚、狼平往復
- 11 炭焼きの鉄砲借り、鳥打ち
- 12 峠往復―帰京
- 7月 大菩薩嶺 (遠藤、他1)
- 7/2 塩山―唐松尾根―大菩薩嶺―峠―番屋
- 7月 駒・仙丈・北岳・鳳凰 (単独)
- 7/13 日野春―柳沢―屏風小屋
- 14 一甲斐駒―仙水峠―北沢小屋―仙丈小屋
- 15、16 滞在
- 17 一仙丈―野呂川越―間ノ岳―北岳小屋
- 18 一北岳―大樺沢―広河原小屋
- 19 一白鳳峠―地藏岳―鳳凰小屋
- 20 一観音岳―北御室―青木湯―葦崎
- 10月 赤石・悪沢岳 (斉藤正治、遠藤)
- 10/21 身延―雨畑―西沢小屋
- 22 一所ノ沢越―樺島への道崩壊のため、所沢・倉沢間尾根、尾根で野営
- 23 一倉沢―樺島
- 24 一赤石小屋―赤石岳―荒川小屋
- 25 一悪沢岳―二軒小屋
- 26 一転付峠―新倉―角瀬
- 27 一甲府
- 12月 富士山 (堀岡清、中島孚、鷹野雄一、他1)
- 12/3 吉田―五合目池谷小屋
- 4 一頂上往復
- 5 一屏風岩往復
- 6 一吉田
- 12月 五色温泉スキー合宿 (十合健二ほか多数)
- 12/18―1/3 宗川旅館 泊

1934 (昭和9年) ・ 予科3年 ・ 20歳

- 1月 八ヶ岳 (斉藤)
- 1/3 茅野―赤岳鉱泉
- 4 一行者小屋―中岳・阿弥陀岳間の沢を偵察、雪深くデブりに逢着引返す
- 5 一阿弥陀のコーラ―中岳―赤岳―鉱泉
- 6 一南沢―途中引き返す―茅野
- 1月 霧ヶ峰 (単独)
- 1/7 上諏訪―清水平―車山―上諏訪
- 2月 甘利山スキー (単独)

- 2/ 3 葺崎－研場－白樺小屋
 4 ー研場－葺崎
 (「山小舎」欄に〈冬の甘利山で〉と題する随想寄稿あり、“無人の静寂境を滑ろうという
 目的は果たせなかったが、案外な掘出物をした”とある。)
- 3月 富士山 (森脇芳之、望月達夫、斉藤)
 3/ 7 吉田－五合小屋
 8 滞在
 9 七合半まで往復、雪固く強風で引返す
 10 八合まで往復、烈風と寒気に危険を感じ退却
 11 ー吉田
- 4月 甲斐駒ヶ岳 (単独)
 4/22 牧原－笹平－屏風小屋
 23 ー七丈小屋－頂上－笹平－日野春
 (紀行記事にこうあり、“地獄谷に臨む急傾斜を登る時は自重して一步一步ステップを深く切って登る。何しろこんな所で独りスリップしたら全く絶望だ。”)
- 5月 谷川岳 (新入生歓迎登山、林俊介ほか多勢)
 5/20 湯檜曾－土合－西黒沢－頂上－天神峠－谷川温泉
 21 ー水上
- 6月 白根三山 (林俊介、森脇、小林重吉)
 6/13 甲府－大曾利－夜叉神峠－鮎差－蝮平小屋
 14 ー池山御池－北岳三角点下－北岳小屋
 15 ー間ノ岳－農鳥岳－大門沢小屋
 16 ー西山温泉

(以上、『針葉樹』7号掲載)

- 7月 後立山縦走 (塚本駿、佐々木誠、白馬まで他3)
 7/ 6 大町－猿倉－白馬館
 7 ー唐松岳小屋
 8 ー冷池小屋
 9 ー針ノ木岳－平ノ小屋
 10、11 豪雨停滞
 12 雨中、五色ヶ原往復
 13 ーザラ峠－別山神社－剣沢小屋
 (剣沢生活パーティ、望月、小林、鷲崎雄四郎と合流)
 剣沢生活 (中島、佐々木、宮川雄二郎、入山)
 14 八峰上半 (望月、小林、鷲崎)
 15 源治郎尾根 (中島)
 16 雨停滞
 17 八峰 (三峰直下のフェースより取付く) (中島)
 小谷部のみ帰路、平蔵谷下る

- 18、19 雨停滞
- 20 ー弥陀ヶ原ー藤橋
- 21 ー千垣
- 8月 六甲摩耶山 (単独)
- 8/26 芦屋ー寒天小屋ー六甲天幕村
- 27 ー摩耶山ー布引ー神戸
- 9月 空木岳・木曾駒ヶ岳 (単独)
- 8/31 須原ーケサ沢分岐点小屋ー滑川合流点
- 9/ 1 ーケサ沢遡行中途引返しーケサ沢小屋
- 2 ー滑川小屋ー北沢ー南駒ヶ岳ー摺鉢窪小屋
- 3 滞在
- 4 ー空木岳ー檜尾岳ー宝剣岳ー木曾駒ー木曾小屋
- 5 ー金懸5合目小屋ー上松
- 10月 高尾山 (森脇)
- 10/13 浅川ー高尾山ー小仏城址ー日影沢小屋ー浅川
- 11月 鹿島槍天狗尾根 (森脇、鷹野)
- 11/ 3 築場ー黒澤峠ー鹿島造林小屋
- 4 ー荒沢出合ー大滝ー二俣ーシュルンドでビバーク
- 5 ー天狗尾根末端ビバーク (東尾根予定の鷹野、断念し天狗同行する)
- 6 ー小舎岩ージャンクションでビバーク
- (「紀文」欄に〈鹿島槍ヶ岳東面・四、天狗尾根〉森脇芳之記あり。シュルンドに阻まれ荒沢遡行を断念、天狗尾根に登る。悪天候にビバークを重ねたこの苦難の登山が皮切りで、以降小谷部主導の一橋山岳部は積雪期岩壁登攀活動へと傾斜していく。)
- 7 ー吹雪の中、北槍へー三高遭難者手当ー南槍ー西俣スキー小屋ー鹿島部落
- 8 鹿島ー救助のため西俣スキー小屋まで
- 9 吹雪続く、停滞
- 10 吹雪のため、冷小屋入り断念し戻る (森脇、鷹野下山)
- 11 ー大町対山館
- 12 ー西俣スキー小屋 (有明ガイド・大和由松ほか救助隊と)
- 13 ー冷小屋
- 14 猛吹雪で戻る
- 15 停滞
- 16 ー南槍、遺体発掘ー冷小屋
- 17 ー対山館
- 18 帰京
- (「雑記」欄に〈N君の遭難に關係して〉と題する寄稿あり。酷烈な吹雪の中、釣尾根で内藤氏発見、歩行不可のため寝袋に入れ風陰安置して救援再来のつもりが、結局吹雪継続で遅れ救助ならず。“N君。約束を果し得なかつた非力の私を許して呉れ。”と苦渋の記述がされている)。
- 11月 岩殿山 (塚本、鷹野、湯田坂哲)

11/25 大月ー頂上ー大月（部員の懇親旅行、前日雨で参加少なし）
12月 武州大岳山（単独）

12/16 御岳橋ー御岳山ー大岳山
17 頂上往復ー御岳橋

12月 鹿島槍ヶ岳東尾根（鷹野）

12/23 大町ー鹿島
24 ー大川沢出合ー一の沢頭下百メートル地点
25 停滞、掛小屋造る
26 2200m突起まで往復
27 ー第一岩峰試登後、三の沢途中まで行き、悪天のため引き返す
28 ー大川沢手前
29 ー鹿島
30 ー大町

（「紀文」欄、〈二、東尾根〉鷹野雄一記あり。前記の11月天狗尾根は変則登行、遭難救助難航などあり消耗したとは言え、初冬山行であり、本山行が初の冬期山行である。天候に恵まれなかったため、肝心の第一岩峰に取り付かず、三の沢に逃げて捗々しい結果を出さず退却しているが、朝の出発遅れや、ラッセルに手間どるなど、積雪期登山に不慣れな様子を見せている。こういう学習が忽ち次に生きてくるのだが、これは布石となった意味深い山行というべきか。

なお、東尾根冬期初登は、数日前の12月19～21日、立教大湯浅巖らによる。積雪期初登としては前年1933.4甲南高校田口二郎ら。

因みに、一橋山岳部としては、戦後1960年12月に鹿島槍集中合宿中、小林進二さんが悪天を押し冬期に第一岩峰に登り切っている。）

1935（昭和10年） ・本科1年・ 21歳

1月 八方尾根・五龍岳（鷹野）

12/30 四ッ谷ー細野
31 ー黒菱小屋

1/ 1 滞在
2 ー唐松小屋（別パーティの増山清太郎、堀岡清、斉藤と会う）
3 五龍岳往復ー黒菱小屋（別パーティは不帰の嶮往復）
4 ー細野ー白馬館

1月 神ノ田圃・榎池（斉藤、小柳二郎）

1/ 5 ー落倉スキー小屋
6 ー御殿場ー神ノ田圃ー天狗原ー神ノ田圃早大ヒュッテ
7 ー乗鞍岳ー落倉ー森上ー浅間温泉

1月 鹿沢・菅平（単独）

1/ 8 松本ー田中駅ー地藏峠ー鹿沢温泉
9 ー地藏峠ー湯ノ丸山ー角間峠ー鹿沢

- 10 一鳥居峠一菅平
 11 一猫岳一菅平一菅平口
- 1月 霧ヶ峰 (森脇、ほか多数)
 1/19 上諏訪一清水橋一車山一カボッチョ小屋
 20 一カボッチョ山一清水橋
- 1月 霧ヶ峰 (先輩学生懇親スキー、中川孫一ほか多数)
 1/26 先発隊林ら、富士吉田から馬返に行き、ゲレンデ雪なしとわかり転進、上諏訪へ、
 本隊、上諏訪たかの湯 泊
 27 一霧ヶ峰一上諏訪
- 2月 高尾山スキー (森脇)
 2/ 3 浅川一高尾山
- 2月 大菩薩近傍 (単独)
 2/ 6 塩山一大菩薩館
 7-10 滞在、付近散歩
 11 一大菩薩峠往復一帰京
- 3月 野沢温泉スキー (塚本ほか多数、酒屋旅館泊)
 3/10-12 ゲレンデスキー練習
 13、14 毛無山往復
 15-17 練習
- 3月 蓼原スキー (単独)
 3/17 蓼原一スキー場
 18 一奥峰一蓼原
- 4月 富士山スキー登山 (単独)
 4/13 富士吉田一馬返一五合目小屋
 14 一吉田口頂上一剣ヶ峰一吉田口頂上一七合半スキーデポ一馬返
- 6月 カクネ里より鹿島槍ヶ岳 (単独)
 6/ 6 神城一小遠見山
 7 一大遠見一白岳下一シラタケ沢一二俣、カクネ里偵察
 8 一カクネ里のつめ一奥の雪渓から支稜を登攀し主稜線へ一北槍一釣尾根一北俣雪
 渓下降一鹿島造林小屋
 9 一荒沢出合一大川沢廻行一俣一俣一大川沢下降一造林小屋
 10 一黒澤峠一築場

(「紀文」欄、〈鹿島槍ヶ岳東面・五、カクネ里〉に本登攀行の記述あり。

“[カクネ里最奥の沢の] 雪渓が無くなって、このルンゼ上部をなす十米足らずの草を交えたアンサウンドの岩場を攀じる、冷や冷やし乍ら一つの難場を細い枝を頼りに乗り越す……真下に亀裂だらけの雪渓が物凄く波打って居るのに全く慄然として了ふ……約三十米、垂直だが、……ホールドが悪い為、機械体操懸垂式が多く、流石に腕がだるくなってつた。あんな細い枝へよくも全体重をかけられたものだ。……若しぶすりと抜けたら直下百米。明らかにハイ左様ならである。こう言ふ登攀に単独行はどうかとも思った。ここ迄来た以上何とも致し方ない。”

この山行は小谷部全助極限的登攀体験の初めと言ってよいが、それよりもここで示した直観的に登攀ルートを直視突破するセンスと大胆さは素晴らしい。登攀史上、これは北壁右ルンゼの単独初登ともみなされている。なお右ルンゼ積雪期初登は同年3月、浪速高校今西寿雄らによるが、それが北壁全体の積雪期初登であった。今西はその後マナスル初登者となる。

同稿では又、その登山観といった主張も以下のように述べおり、これこそ当時の山岳界で最も革新的正統的な見識ともいうべきであり、これより数年間にわたり一橋山岳部が先端的活動を続けていく礎となったものだ。

“私は先づ第一に個人として十分立派なマウンテニヤールの資格を飽く迄獲得したい。…いざと言ふ時実に頼りにならぬ個体で組織された所謂、有機的登山システム程下らないものは無い……日本に於いては、殊に吾々若い学生に関する限り飽く迄、将来立派なシステムを構成し得べき個体の完成に邁進すべきが本当ではなかろうか。……完成とは単に体力、技術の完成のみではない、情操、人格をも同列に含む事は言ふ迄もない。”

6月 北岳バットレス (鷹野、森川眞三郎)

- 6/19 葦崎—青木鉱泉—北御室小屋
- 20 —白鳳峠—広河原小屋—大樺小屋
- 21 滞在
- 22 バットレス下、岩小屋辺りまで偵察
- 23 第3尾根登攀(初登)
- 24 —広河原—白鳳峠—葦崎

(「雑記」に〈北岳バットレス行〉鷹野雄一・記あり。“ふとバットレス行きの話が出、”ということらしいが、このバットレス初見参に当って選んだルートは、京大の報告《註》を参照しており、第3尾根は“這松の急斜を攀じると、十六、七米の垂直な岩峰にぶつかる。……吾々は岩峰の真中にあるクラックを登ってみた。此のクラックは下の雪溪からも見えるもので、ちょっと面白い。”と冷静な記述である。)

《註》『関西学生山岳連盟報告<I>1930』の巻頭に所収の「北岳バットレス登攀—京都帝大細野重雄」に記載されている。1929.7.11—21、高橋健治(リーダー)、酒戸弥二郎、奥貞雄、細野重雄、竹澤長衛(人夫)によってなされた、この初登攀記と岩壁の概要紹介が、バットレスの文献記録の嚆矢であり、以降登る人必見の資料となったようだ。壁全容の写真2枚とスケッチ1枚に番号を振った可能ルートが図示されており、その時の登攀ルートはdガリーから第4尾根と第5尾根間の壁、7月11日5時間半で基部から頂上に至っている。

7月 上高地天幕生活

- 7/ 9—29 小谷部単身で9日上高地到着、清水屋に預けてある商大テントを玄文沢に張り、以降29日に撤収するまで、部員23名、先輩2名、ほか8名、計33名参加。空前の賑やかさ、と記されている。その間、小谷部の行動、以下のとおり。

前穂高岳 (単独)

- 7/10 上高地—岳沢—前穂高—吊尾根より涸沢—横尾—上高地
(11時間で踏破している。)

槍ヶ岳 (岩崎利一、鷹野、小林)

- 7/12 上高地—殺生小屋

- 13 雨、滞在（鷹野、小林、天丈沢より合流）
 - 14 ー大槍東鎌尾根近くの岩壁ー槍ヶ岳ー小槍登攀（南面）ー殺生小屋
 - 15 ー上高地
- 曇岩登攀・奥穂高岳（和田栄達、ほか1）
- 7/19 上高地ー曇岩登攀ー奥穂高ー穂高小屋
 - 20 和田ほかは涸沢へ、小谷部単独で、北穂高往復ー奥穂・前穂間雪渓を岳沢へ下る
 - ー上高地
- （ホールドのない純逆層の曇のような一枚岩を細い溝に指を入れて辛くも体を支える、など記述あり。岳沢へのグリセードは扇沢か？ 3時間で下っている。）

錫杖岳・烏帽子岩登攀（斉藤）

- 7/25 上高地ー中尾峠ー錫杖沢出合ー錫杖沢岩小屋
 - 26 ー北沢ー中岳ー烏帽子岩東肩ー烏帽子岩登攀ー東肩ー北沢の滝下降ー岩小屋
 - 27 ー槍見温泉ー槍平
 - 28 ー槍肩の小屋ー小槍登攀（東面）ー上高地
- （「雑記」欄に〈錫杖岳〉の随想あり。“烏帽子岩登攀。これは錫杖に於ける最も興味ある登攀である、と言っても決して過言ではない。……登攀のルートとして選ばれているのは現今では東肩からのみであらうと思ふ。……東肩から小槍のリッジを思はせる様な岩を攀じて……一寸下って又登ると二段のチムニーにぶつかる。……大きな岩の裂目を通して頂上に出る。”）

8月 カクネ里生活（森川、鷹野）

- 8/23 築場ー黒澤峠ー鹿島造林小屋
 - 24 ー荒沢出合ー大川沢二俣下
 - 25 ー二俣岩小屋
 - 26、27 カクネ里偵察
 - 28 ー奥のルンゼ右の尾根登攀ー主稜線ー北槍ーキレット小屋（鷹野と2人）
 - 29 暴風雨、停滞
 - 30 ー岩小屋
 - 31 ーキレット沢ーキレット小屋
 - 9/ 1 ー北槍ー東尾根第二岩峰登攀ー北槍ー赤岩尾根ー鹿島
 - 2 帰京
- （“相当な登攀をなすべく張切って来たのだが連日の悪天候”と記録欄にあり、キレット沢回避の尾根ルート、東尾根の岩峰を登ったのみ。）

（以上、『針葉樹』8号記載）

10月 前穂高北尾根・ジャンダルム飛騨尾根（単独）

- 10/17 上高地ー徳澤小屋
- 18 ー奥又白池目指し、下又白谷、奥又白谷入るも風雨で引返すー横尾ー涸沢
- 19 ー穂高小屋
- 20 ー涸沢ー北尾根5、6のコーラー前穂高ー奥穂高ー穂高小屋
- 21 ー奥穂高ージャンダルムー飛騨尾根懸垂下降ー第3テラス下より西方ルンゼー

ジャンダルム西方のコルー奥穂高ー穂高小屋ー横尾岩小屋

22 ー上高地

(積雪多く、穂高小屋へは所々腰迄もぐるラッセル、北尾根は新雪で苦闘、4峰などはザイルで自己確保、ジャンダルム迄の雪稜相当悪し、西方ルンゼ2米の氷の滝突破、など記載あり。)

10月 北岳バットレス (村尾金二、望月、小林、和田、佐々木誠、西野博、岩崎、森田三雄、人夫・奥原守)

10/27 葦崎ー鳥居峠ー青木鉱泉

28 ー北御室ー高嶺ー白鳳峠ー広河原小屋

29 ー大樺小屋

30 ー第7尾根(バットレス最左部斜面)ー頂上ー大樺小屋(岩崎、西野、森田、奥原)、ー夏道を頂上ー北岳小屋(和田)

(同日、村尾、望月、小林、第4尾根マッチ箱直登ルート初登するも登攀終了遅く、帰路迷う。夜、小谷部、和田、懸念して頂上に登るもすれ違い、深夜北岳小屋に達す。)

31 ー大樺沢ー大樺小屋

11/ 1 ー第5尾根ー頂上ー大樺小屋(望月)

2 ー広河原小屋ー五葉尾根基部

3 ー杖立峠ー芦安

11月 白馬岳スキー (吉沢一郎ほか多数)

11/23 大町ー猿倉スキー小屋

24 ー白馬尻ー村宮小屋ー白馬岳ー猿倉ー大町

12月 大岳山・海沢下り (小林、高原龍雄)

12/ 1 滝本ー御岳山ー大岳ー海沢ー鳩ノ巣

12月 北岳バットレス・第3、5尾根 (鷹野、小林)

12/ 7 甲府ー大曾利ーカリヤスー杖立峠ー五葉尾根小屋

8 ータテシ沢ーシレイ沢岩小屋

9 ー広河原小屋ー大樺小屋

10 ーdガリーの氷壁登攀ー氷壁上雪渓ーフィックス張り下降ー小屋

11 ーdガリーー第5尾根ー頂上ー池山吊尾根ー大樺沢ー小屋

12 停滞

13 ーdガリーー第4尾根下部横断ーcガリーー第3尾根(初登)ー頂上ー大樺沢ー小屋

14 ピッケル回収のためdガリー往復

15 ー広河原小屋ー白鳳峠ー北御室小屋

16 ー青木湯ー葦崎

(巻頭記事《厳冬の北岳バットレス》の〈3. 登攀報告ー第1次登攀〉に登攀記述あり。

dガリーの氷壁を突破しcガリーへ横断するルート開拓が核心だったが、周到な偵察、5尾根で腕試しと、着実な過程を経て、好天下最初の積雪期初登攀を第3尾根で果たした。尾根登攀自体は、中段のクラックから右壁トラバースがアイゼン爪1本に頼る緊張感あ

るものだったと記されている。それよりも登攀後頂上での次の感激描写が意味深い。
“嬉しかった。嬉しかったのだと思ふ。……想像していた感激とか、歓喜とか言ふものとは凡そ似てもつかない様な気持だったから。唯「やるべき事をやった」「やれて了った」と言ふ風にしか思はれなかった。”

初登攀などという名目よりも、極限的な登攀の充実感が肝心なのだ。）

12月 乗鞍岳スキー合宿（望月ほか多数）

12/22 松本－鈴蘭－冷泉小屋

23－28 位ヶ原ほかでスキー練習。25日、9名頂上往復。小谷部のみジュラルミンのエッジをきかせて頂上までスキーにて登る。

12月 西穂高岳（鷹野、望月）

12/28 冷泉小屋－番所－沢渡

29 ー上高地五千尺旅館

30 ー岳沢－天狗沢手前の沢－西穂高第2峰－往路戻り上高地

1936（昭和11年） ・本科2年・ 22歳

1月 前穂高北尾根（鷹野）

12/31 上高地－徳澤小屋

1/ 1 ー奥又白池－4、5コルー前穂高頂上－A沢－徳澤

2 ー徳本峠－島々

1月 木曾御岳（単独）

1/ 9 木曾福島－黒澤－屋敷野、浦澤方

10 ー6合目中ノ小屋

11 ー8合半スキーデポー頂上－屋敷野

12 ー黒澤

1月 富士山（新羅二郎、松浦静雄、関根修）

1/25 富士吉田深夜着、スキー夜間歩行

26 ー馬返－5合目－スキー練習－富士吉田

3月 野呂川遡行・仙丈岳（単独、スキー携行）

3/ 4 甲府－大曾利－夜叉神峠－鮎差

5 野呂川沿いスキー登行、再三渡渉、一蝮平小屋－五葉尾根分岐下流

6 ーシレイ沢岩小屋－広河原小屋

7 大樺小屋往復

8 野呂川遡行－北沢長衛小屋

9 仙水峠へスキー往復

10 ー藪沢出合－小仙丈－仙丈岳－北沢小屋

11 ー北沢峠－戸台－高遠への街道

（記録欄にこの単独行の冒険談をかなり詳しく述べている。“今一度、あのバットレスの岩と氷にぶつかって見たかった”というのが当初の目的だったようで、ついでに雪に埋もった沢をスキー登行する狙いだったのか？ 実際は冷水の溪流渡渉などに苦闘し、

“広河原近くで一ヶ所スノーブリッジが壊れて重荷をかつぎスキーもはいた儘小さな滝状の流れに落ち込み危く下の青々とした深い淵へはまる所だった。スキーをはいて居るので凄い力で引き込まれるが夢中になって滝の傍の岩角にしがみつき、ほうほうの体で這い上がった時は実に胸をなで下した。” 相当な自信と体力が無ければ成し得ない快拳ではある。）

3月 野沢温泉スキー合宿 (柿原謙一、ほか多数)

3/12 9日から始まっている合宿に中途参加。

13、14 スキー練習

15 一木曾福島 (合宿は18日まで続く。参加者はバラバラと随時到着、帰去。)

3月 木曾御岳 (佐々木)

3/16 木曾福島ー黒澤ー6合目中小屋

17 小谷部不調、佐々木のみ登るが、9合目でスリップ、怪我。木曾福島へ下し、医者手当、佐々木のみ夜行帰京。

18 駅前で、森脇、松浦、関根と合流ー中小屋

19 体の調子悪く小谷部下山、帰京。

4月 [昭和11年度一橋山岳部代表就任]

5月 富士山 (森川、日江井正巳、大塚武)

5/2 富士吉田ー5合目小屋

3 一頂上ー富士吉田 (小谷部のみスキーで登頂、大沢を下る)

5月 剣岳 (和田、岩崎)

5/9 千垣ー藤橋ーブナ坂小屋ー弘法小屋

10 一追分ー天狗平小屋

11 一室堂ー雷鳥沢ー剣御前小屋

12 一長次郎谷ー八峰5、6峰コル往復ー源治郎第2峰下ー同尾根登攀ー頂上ー平蔵谷ー剣沢ー剣御前小屋 (小谷部単独)

13 一天狗平小屋

14 休養、スキー練習 (森脇、松浦、関根、合流)

15 一の越ー立山雄山 (往復)

16 一藤橋ー富山

5月 鹿島槍荒沢奥壁 (森川)

5/27 築場ー黒澤峠ー鹿島造林小屋

28 滞在

29 一大川沢ー荒沢出合ー大滝下ー左岸高捲きー滝上幕営

30 一荒沢二俣ー北稜取付ー第1岩峰ー第2岩峰ー左上雪渓ー東尾根ジャンクションー北槍ー北俣下るー冷沢スキー小屋

31 雨、滞在

6/ 1 一造林小屋ー大川沢ー荒沢ー幕営地

2 一大川沢ー黒澤峠ー築場

(北稜に目標を定める。第1岩峰は基部で左岩壁へ巻く、第2岩峰基部にて再び左へ巻く、岩脆く微妙なバランスを要した、と記録欄にあり。)

7月 穂高涸沢合宿 (林ほか多数)

- 7/ 9 島々-徳本峠-上高地 (小谷部単身先登、人夫5人連れ45貫余の荷物運ぶ)
- 10 本隊受入れ準備など。横尾谷の橋流失しているので人夫派遣。
- 11 -前穂・奥穂のコーラー涸沢 (天幕地確保のため、小谷部、森川)
- 12 -北尾根-前穂高-上高地
- 13 徳澤へ荷上げなど。
- 14 -涸沢、 全員21名揃い入山。
- 15、16 グリセード練習など
- 17 涸沢槍側稜 (新羅、松浦、関根)
- 18 前穂北尾根 (大塚、日江井、斉藤)
- 19 滝谷第5尾根 (森川)
- 20 休養。合宿終わり、以後自由行動 (それまで、まず縦走してから集合し定着合宿としていたのを、小谷部リーダーの意向か、先に全員合宿で統制ある行動、解散後自由行動とした。中核部員のみの高峻遠隔の地で更に向上訓練、が狙いか。)
- 21 北尾根三峰フェース (森川、望月)
- 22 滝谷第四尾根 (森川、望月)
- 23 -上高地

8月 鳶谷から薬師岳、槍ヶ岳縦走 (吉沢、村尾)

- 8/16 富山-藤橋-真川出合
- 17 -真川水電取入口
- 18 -岩井谷鳶谷出合-第2の滝-1700m地点
- 19 -二俣から右俣へ-奥の二俣から左俣へ-薬師岳-薬師沢-2000m付近
- 20 -黒部川奥の廊下-三俣蓮華-双六小屋
- 21 -槍沢-上高地

9月 塩見より北岳 (単独)

- 9/ 2 伊那大島-鹿塩・山塩館
- 3 -三伏峠小屋
- 4 -塩見岳-三峰岳-間の岳-北岳小屋
- 5 -大樺沢-大樺小屋

9月 北岳バットレス、第1、4尾根 (望月、森川、大塚、日江井)

- 9/ 6 第4尾根登攀 (森川)
- 7 停滞
- 8 第1尾根登攀 (森川)
- 9 -広河原-白鳳峠-地藏岩 (小谷部単独で登攀) -北御室-青木鉱泉
- 10 -韭崎

(この冬の積雪期登攀を予定した偵察のための登攀。第4は4時間、第1(初登)は3時間で登っている。第1の核心部上部オーバーハングは、“再三撃退された後やっと乗越す。”と記録欄にあり。支稜から尾根主稜に取付くトラバースはノーザイル。この偵察

登攀を始め、積雪期登攀を実践する前には必ず無雪期試登を行っており、慎重に計算づくの初登攀狙いであることが判る。）

10月 大武川より北沢峠 (小林、森脇、和田、森川)

10/16 日野春一藪ノ湯一サデの岩小屋

17 一仙水峠一北沢長衛小屋 (摩利支天南稜登攀、雨で中止)

18 一戸台一高遠

11月 富士山・屏風尾根 (森川)

11/ 1 富士吉田一馬返一5合目小屋

2 一屏風尾根一白山ヶ岳一吉田口頂上 (往復)

3 一富士吉田

11月 奥又白谷より前穂高 (森川)

11/27 中の湯一上高地一徳澤

28 一奥又白谷2つ目の滝、重荷背負って登る内氷割れ、小谷部5、6m滑落一下のルンゼ出合幕営

29 足の様子見のため停滞、森川徳澤往復

30 小谷部停滞、森川は池よりA沢經由前穂高往復

12/ 1 停滞

2 一徳澤、小谷部右足首紫黒色、激痛あり

3 一上高地一中の湯、徳澤で松葉杖つくり歩く

(レントゲン検査で、踝2つに割れ、上部の骨にもひびある骨折とわかる。)

12月 北岳バットレス、第1、4尾根 (森川、望月、大塚、日江井)

(12/24 先発隊、望月、大塚、日江井、甲府より大曾利青木方、夜叉神峠荷上往復人夫、清水義雄、福長、英長、名取治一 雇う。

25 一夜叉神峠一鮎差一蝮平小屋

26 一池山吊尾根、途中人夫返す、御池より1時間上にC1設営

27 一人夫引返点まで下り荷上げ、2度往復

28 一亡魂沢頭一北岳頂上 (往復)

29 C1滞在、大塚のみ下山)

12/27 登攀隊、小谷部、森川、甲府一大曾利、人夫名取治太郎雇う、一夜叉神峠一蝮平小屋

28 一C1、治太郎下山

29 亡魂沢頭荷上往復

30 一亡魂沢頭一2950mの頭、C2設営、(小谷部、森川、望月、日江井、揃う)

31 終日吹雪、停滞

1/ 1 滞在

2 第1尾根登攀 (積雪期初登) (森川)

3 滞在、望月、日江井、下山

4 一bガリ一第2尾根下まで偵察 (往復)

5 第4尾根登攀 (積雪期初登) (森川)

6 一C1

- 7 滞在
- 8 小谷部 C2 へ荷降ろし往復、森川蝮平小屋まで荷降ろし往復、後 C1 撤収一下山途中ビバーク
- 9 一蝮平一夜叉神峠一大曾利
- 10 一甲府

(前月奥又白で骨折した足首は、接着したがまだ痛む、という状態で、冬の岩登りを強行する。

わずかに部員 3 人のみのサポート、先発して荷上げしてもらっても、途中下山、人夫も予定したほどの荷上げ協力ならず。サポート部員の献身的努力でキャンプ設営はされたが、最後は登攀隊 2 人のみでの第 4 尾根初登である。

しかし小谷部流の発想は雄大なのだ。巻頭記事《厳冬の北岳バットレス》1. 前書にあるように、“遠征の名に陰れて安逸を貪る如き卑怯な態度をとらぬ様……昨今の遠征熱と共に盛になった極地法を用いて、同じ個所をアタックするにしても故意に迂回せるルートを選び、登攀そのものを拡大しやうと言ふのが眼目なのである。” こうして、池山吊尾根にキャンプを 2 つ設けて、“厳冬の暴威に直面しつつ悪場をアタック”するのである。成果は積雪期初登攀であるが、極地法登山であることが、“海外のより高峻なる山々への遠征に対し此上なき練習になる……点において特に意義大なるものと信ずる”と記している。

第 1 尾根は、支稜ぞいの氷化したルンゼに 2 時間、主稜への 30 米バンドトラバースは“脆岩でホールドも下向きで甚だ不安定……積雪の為此の小さな名ばかりのバンドは全然無いと言ってもよい状態になって了ひ露岩を散ばめた雪壁と化して居る。まるで垂直に見えて一寸怖気づいたが丹念にピッケルを振って大きくステップを刻み、遅々とトラバースを続け”て 2 時間余かかり、主稜に辿り着いたのが午後 3 時半。更に核心部の“岩稜が刃の様に薄く且 2 米程全くオーバーハングして”いる最難所では、日暮れと競争で決死の覚悟で乗切り、続くクラックにはピトンで電光形にベタ打ち、更に懐中電灯をぶら下げて雪稜を登る。“乏しい光線に照し出される雪のナイフリッジを辿る気持ちは……悲壮且暗澹……死の恐怖からやっと解放された歓喜も底にうずいて……慎重にラッセルを続け北岳頂上に着いたのは午後 8 時半……夜途と疲労の為矢張り慎重を重ね、C2 へ戻ったのは十時も過ぎんとする頃だった。” こうしてバットレスで最も苦闘した登攀が劇的に完遂されたのである。

第 4 尾根は、余裕の登攀だったが、難所 2 ヶ所。マッチ箱下部の雪壁では“途中でザイルが伸び切った了ひ、私は体をぴたりと急な雪面にくっつけうつ伏した儘肩で確保して森川に暫く上って貰ったが、今から考へると冷や汗ものであった。” 問題の第 2 コル上のスラブは、無雪期には際どいフリクションで辛うじて登るところだが“冬はこんな事は出来ぬから随分心配して来たものであったが、有難い事にコルの積雪が薄く壁の右側に這ひ上ってリッジの雪稜に続いて居る。而して雪も手頃に緊って居るのだ。ここは第 1 尾根のオーバーハングと同様、第 4 尾根の最難関なので登攀可能の見通しのついた吾々の喜びは、この上ないものであった。”

その後 2 人だけで、悪天や重荷に苦勞して撤収下山。9 日もボタン雪舞う日暮れに、大曾利に辿り着いたが、“まるで恐い所から逃げて来たかの様な気持と、凱旋將軍の様

な気持を取りまぜた様な奇妙な気持で、青木方の戸をたたいた。”当時最高度の構想を立て、周到に準備し、怪我にも打ち勝ち、希少な友人の援助だけで、生命の不安を押し切って、冷静果敢に行動し、登攀史に残る成果を為した、ここに至る過程に示してきた気概や心理の表現には実に人の胸を打つものがある。）

1937（昭和12年） ・本科3年・ 23歳

3月 遠見尾根より鹿島槍荒沢奥壁（森川、1次サポート：小林、鷲崎、宮城恭一、
2次サポート：森脇、大塚）

- 3/15 神城—遠見小屋—小屋上 C1
- 16 ガス、滞在
- 17 吹雪、滞在
- 18 雪、滞在
- 19 小雪、滞在
- 20 一大遠見先 C2 設営、1次サポート隊下山
- 21 荷上げの為、小遠見往復
- 22 ーシラタケ沢—二俣—カクネ里—天狗尾根 2350m C3 設営、
後、浪高生遭難に遭遇、小谷部カクネ里浪高キャンプ往復、
2次サポート隊遭難者搬出協力—C2
- 23 快晴なるも遭難応援に備え滞在
- 24 吹雪、滞在
- 25 吹雪、滞在
- 26 吹雪、滞在
- 27 烈風、滞在
- 28 ー奥壁北稜取付—第1岩峰—M岩峰—岩峰上で一旦ビバーク—
夜11時半、天候悪化見て登攀再開
- 29 ー夜間登攀継続—夜明けまで小舎岩に待機—天狗尾根下降—C3
- 30 滞在
- 31 ーカクネ里—C2、2次サポート隊と合流
- 4/ 1 ーC1—神城

（巻頭記事《三月の鹿島槍荒沢奥壁》によれば、北岳後の展開として当初は、奥又白池 C1、前穂高 C2、奥穂高 C3、涸沢岳コル C4、滝谷最困難部登攀、という野心的計画を、“登攀そのものの大いさ困難さを故意に増大せしめて、より高峻なる海外遠征のままならぬ憂さをかすかに晴らす”ために立てたものの、参加部員7名に激滅のため、“適合する程度に登山の大きさを縮小して”、それでもなお“本邦登山史に於ける殆んど終末的な積雪期初登攀を目指す”荒沢奥壁プラス遠見尾根極地法登山を選んだ、とある。

前年5月に試登している北稜（無雪期は1935年7月浪高初登）の積雪期初登が目標。最初の難関第1岩峰は、左側岩壁を登る。“キリキリとアイゼンは岩にきしり、全神経をもって、ホールドを求めつつじりじりと攀じ……饅頭形に大きく吹溜った雪のブロックには容易に登れず、長い時間をカッティングに費やす”。

続く巨大茸状雪塊のリッジ、徹底的な掘割工作、“こんな遅々たる、そして苦しい登攀は全く初めてである。”そして最難関のM峰、右のバンドから“のしかかる雪の堆積を頭で打ち壊したり、ピッケルを真上にふりかざしたりして悪戦苦闘の数時間の後この難場を克服し、M峰上の雪稜上に出た時は将に暗闇一步前”だった。そしてビバーク、ツェルト取落とし、天候急変、夜間登攀、小舎岩岩穴仮泊、吹雪の下降、右支尾根へ迷い込むが気付く、など劇的冒険の末、深夜 11 時半 C3 帰着する。“無事半埋没の C3 へ戻れた時は涙が出る程嬉しかった。”と言う。登攀そのものの困難克服も素晴らしいが、手記の巧みな表現には的確な場面説明、心理描写など含み、単なる行動記録以上の感動的印象を読む者に与える。）

(以上、『針葉樹』9号記載)

4月 [昭和12年度開始、望月達夫代表就任、本科3年部員はほかに小谷部、小林、森脇、和田、本2に森川ほか、本1に船本ほか、予3に大塚、日江井ほか、予1に山田ほか]

4月 大蔵高丸 (望月ほか多数、新入部員歓迎登山)

4/25 午前中登頂―田野鉱泉コンパ

7月 剣沢合宿 (小林ほか多数)

7/10 富山―追分

11 滞在

12 一剣沢三田平

13、14、15、16 雨 滞在

17 2・3峰間―八ッ峰―頭―長次郎(里見、山田、小泉)

18 7・8峰間―クレオパトラ・ニードル(里見、山田)

20、21 滞在

22 下山

8月 奥又白生活 (望月、森川、佐々木、日江井)

7/30 一上高地

31 滞在

8/ 1 一奥又白池

2 4峰甲南ルート、途中まで(望月、佐々木)

3 4峰明大ルート、下部右フェース登る(森川)

4 滞在

5 一上高地

6 下山

10月 奥又白生活(森川、日江井、大塚)

10/17 小谷部単独で先行―徳沢

18 一涸沢―北穂高岳(往復、涸沢より積雪1~2尺)

19 大滝山往復(徳沢で皆と合流)

20 一奥又白池

- 21 4峰明大ルート、下部左側ルンゼ（大塚）
（同日、森川、日江井、東壁Cフェース登り、第2テラス下ビバーク。）
- 22 東壁パーティ捜し、前穂高頂上往復
（森川ら東壁完登、池に戻る。）
- 23 停滞
- 24 東壁・北壁ルート（大塚）
（記録欄に、“恵まれた極めて愉快的な登攀、頂上では、今度の行の全く成功せるを喜び合い”とある。）
- 25 一上高地
- 12月 徳澤小舎生活（森川、佐々木、榎本、船本、岩崎、原、大塚、日江井、里見、木島、山田、小泉、久保）
- (12/18 先発隊一森川、榎本、船本、大塚、日江井、中の湯着
19 一徳澤
20 一松高ルンゼ登攀中雪崩に遭遇し、日江井負傷・左腕骨折、一徳澤)
- 12/21 本隊および常盤教授、中の湯着。先発隊は榎本以外、中の湯に下る。
22 日江井は小谷部付添、松本へ下る。そのほか全員は徳澤へ。
23 小谷部、徳澤に戻る。
24 雪、涸沢往復
25 常盤教授下山、小谷部ほか上高地まで見送る。
26 全員前穂に向かうが、奥又白入り口で雪、引き返す。
27 吹雪、滞在
28 榎本、原、岩崎、久保、小泉、徳本峠越え下山、小谷部は峠まで見送る。
29、30、31 吹雪、滞在、里見、山田、木島と共に下山す。

1938（昭和13年） ・3月卒業、4月住友鉱業株式会社入社、大阪勤務 ・ 24歳

- 1月 奥又白幕営生活（徳澤合宿に引き続き、森川、佐々木、船本、大塚）
- 1/ 1 一奥又白池、4峰下までラッセル
2 雪、大塚、船本が下山す
3、4 吹雪、滞在
5 インゼル下端までラッセル
6 東壁登攀の予定だったが、北壁の直下dフェースとのコンタクトラインより1ピッチ登った地点で、天候悪化のため引き返す（森川）一徳沢
7 一徳本峠一島々
- （当初は、小谷部、大塚が4峰バットレス、森川、日江井が東壁、の登攀計画だったが、先発隊の雪崩事故で予定は狂い、更に東壁に集中した変更計画も悪天で退却となった。前穂東壁計画では、既に森川がイニシアティブをとっており、巻頭記事《前穂高東面に就いて》、1.序、によれば、“次の我々の対象はここでなくてはならぬ”と云ふ気持は、森川を中心としてかなり具体的な形”となった。また、同、3.雪崩について、によれば、“大塚が「降雪中の雪崩は大丈夫か」と云って見たが別に誰も返事をしなかった。……

「登っちゃはう」森川が言った。別にリーダーの言葉だから、と云ふ程の間柄でもなかったが皆の気持も似通ったものだった。……ルンゼの出口のデブリの山に向って、先づラッセルの第1歩が日江井から始められた。……雪は相変わらず膝を越し、踏んでも踏んでもズクズクして……迫る様な気配を感じて頭を上げた。一瞬、土用浪の様な白いものが目に浮んだ。”

1月 霧ヶ峰スキー (森川、佐々木)

1/8 (説明記載なし)

1月 卒業部員送別会 (卒業組出席一小谷部、望月、小林、森脇、和田、残留組15名)

1/22 於新宿ぼたん

(この時撮影の集合写真〈下〉が、『針葉樹会報』73号(山田亮三追悼号、1989.7刊)に掲載されている。)

3月 前穂高東壁サポート(森川、船本)

奥穂高(単独)

(森川、船本パーティによる前穂高東壁登攀〈北壁ルート、積雪期初登〉)

3/16 森川、船本、徳澤-奥又白池雪洞

17 -Bルンゼ-東壁取付-北壁登攀-第2テラス-V字状雪渓-主稜線-雪洞

取付8:45、森川トップで7ピッチで第2テラスに出る。5ピッチ目のL字形スラブを“ハーケンからハーケンへ渡り歩く”のに最も時間を要した。更にテラス下のオーバーハングにも苦闘、アイゼンの歯1本に頼り“強引に乗切った”とあり、後続の船本も奮闘の末やっとテラスに到達したのが夜9時、壮烈な登攀である。深夜2時、雪洞に戻るも、手足凍傷を負う。)



昭和13年卒業部員歓送会(1938.1.22)新宿「ぼたん」にて

前列左から、高橋広三郎、榎本直司、森川真三郎、森脇芳之、望月達夫、小谷部全助、和田三郎、久保孝一郎、中列左から、里見治男、木島利夫、岩崎利一、船本文治、佐々木誠、小泉(齊藤)三郎、後列左から、原鉄三郎、宮城恭一、鷺崎雄四郎、山田亮三、大塚武

- 3/17 沢渡一徳澤
 18 一昼過ぎ、奥又白池雪洞に到着、凍傷の2人の世話をする。
 19 一徳澤
 (記録欄に、“前穂高東壁登攀を楽しみに張切って登って来た所、森川、船本の故障の為空しく腕を撫して戻る。”とある。)
 20 ひとり、徳澤より涸沢を経て奥穂高岳往復
 (記録欄に、“学生生活、最後の登頂、……唯一人広い涸沢の雪にシュプールを印す寂莫さ。山を知り始めた頃のものさびた歓喜を仄かに想出しつつ行く、それは洵にしっとりした最後の山であった。”とある。)

(以上、『針葉樹』10号 記載)

大学在学前後の山行：

追悼記「小谷部全助のこと」望月達夫・筆(『山岳』44年2号・1949.12刊に所収、現代登山全集1『日本の山と人』東京創元社1961.5刊に転載)の末尾に、登山年譜(山名のみ記載の簡単なリスト)が付けられており、全山行(船本さんが漏れ1件指摘、追加記載)が判明しているが、大学前後にはほとんど大きな山行なく、大学時代のみが実質的に主要登山記録を残した時期であることがわかる。以下、そのリストよりの抜粋。

- 入学前： 1929.7／奥日光光徳牧場付近、
 1930.1／三ッ峠、
 1931.5／奥日光金精峠、温泉岳、白根山、
- 卒業後： 1939.1／八方尾根より唐松岳、
 1939.8～9、結核罹病中静養の傍ら上高地、涸沢に入り、穂高の各峰に遊ぶ、
 1940.1／遠見尾根より五龍岳、
 1940.2／六甲山スキー、
 1940.3／箱館山スキー、妙見、蘇夫岳スキー、
 1940.7／奥又白より4峰バットレス、
 1940.8／発哺・熊の湯、笠ヶ岳、山田温泉(住友ヒュッテ建設実地踏査)、
 1941.1／岳沢よりジャンダルム、
 1941.8／中尾峠越え槍見温泉、クリヤ谷から笠ヶ岳、小屋泊後笠谷下り蒲田街道、ガイドの大和由松に出会い平湯の船津屋泊、安房峠越え中の湯へ、
 (この山行は、船本文治さん宛手紙に記載あり、その手紙を紹介した『針葉樹会報』50号掲載の船本稿「小谷部、森川両氏の年忌に憶う」に、これが望月年譜に記載漏れだと指摘されている)。
 1942.3／野沢温泉スキー

(1945.12.13.長野県諏訪郡富士見療養所にて逝去。享年32歳。)